『人文学報』第117号（2021年５月）
（京都大学人文科学研究所）

［書　評］

北白川の郷土イメージをつくったのは誰か

志　村　真　幸
（南方熊楠顕彰会）

近所に京大があるということ

『北白川こども風土記』のよくも悪くも特徴的なのは，京大との関係の深さであろう。北白川小学校の学区内に京都大学人文科学研究所があるため，こどもたちが地域学習を進めるにあたり，当然のように京大関係者の協力を仰ぐこととなったのである。彼らは『北白川こども風土記』のあちこちに顔を出しており，具体的に名前を挙げれば，歴史地理学の森鹿三が「序」を寄せ，考古学の羽館易らが遺跡を解説し，地理学の藤岡謙二郎，考古学の小林行雄は父兄として関わった。

小学生が学習活動でやってきたら，「教えたがり」の大学教員はとめどなく情報提供をするだろう。現在と違って時間もありあまっていた（たぶん）から，全面的な協力ができたのである。そうしたバックアップを得られたからこそ，『北白川こども風土記』は，商業出版できるくらい完成度の高いものとなった。

こうした京大との関わりには，『学校で地域を紡ぐ』でも熱すぎるくらいの視線が送られており，いくつもの論文・コラムでとりあげられている。大学と地域が理想的に協働する姿を示した点は，『学校で地域を紡ぐ』の功績のひとつだろう。

それにしても，すぐ身近に人文研のような知的機関が存在し，利用できたとはうらやましい。一方で，ふと思いついて，CiNii で「北白川」と検索してみたところ，地質学や考古学の論文がいくつも出てきた。京大の研究者にとっても，北白川は身近かつ絶好のフィールドでありつづけてきたようだ。

京大というファクターへの注目は，『学校で地域を紡ぐ』の執筆陣に人文研関係者が何人もいるのだから，当然のことだろう。しかし，あえて苦言を呈するならば，京大にこだわりすぎたがゆえに，一般性を失ってしまったきらいがあるように思う。大学関係者の協力なしに成立したこども風土記は各地に無数にあるわけで，京大にばかり重点を置いては，こども風土記というものの本質を見誤ってしまう危険性がある。とはいえ，京大という特殊事情がなければ，現代の研究者たちをここまで惹きつけ，論文集が出ることもなかっただろうから，難しいところか。

古老たち

ただし，『北白川こども風土記』を支えたのは，京大だけではなかった。『学校で地域を紡ぐ』の第２章では堀内寛昭が地域の古老へ注目する重要性を強調し，第３章では黒岩康博がその具体的な名前を示して論じている。実際，『北白川こども風土記』の編集後記によれば，「郷土の遺跡や史跡等」については「大学の先生や有識者」に，「風俗，伝説等」は「土地の古老」から聞き取りをしたという。黒岩は前者を「〈先生たち〉」，後者を「〈おじ

さんたち〉」と呼び，〈おじさんたち〉の実例として，文政の大火についてこどもたちの前で歌ってみせた内田元平，仙人して伝えられる白幽子のことを教えてくれた西村裕次郎などを挙げている。

小学校でつくられた本なのだから，ふつうなら小学生たち自身，それから指導した教諭に目を向けるくらいがせいぜいだろう。ところが，『学校で地域を紡ぐ』が明らかにするのは，北白川に住む／そこで働く多数のひとびとが関わって成立したという事実なのである。こども風土記は，当然のことではあるが，こどもたちだけではつくりえず，おとなの存在が欠かせない。その点をあやまたず，また広い視野でもって調査したのが，『学校で地域を紡ぐ』の価値であろう。

言い換えれば，『北白川こども風土記』は，学校・こどもたち・父兄・地域の古老の結節点にあるのだ。こどもたちの学校での活動でありつつ，地域の風土を知るために地元のひとびとと交流する。インタビューや情報収集に際して，地域の人的ネットワークが活用され，また新たに構築されていく。そして，その複雑な関係性のうえで，北白川という郷土の姿が描きだされたのである。

そもそも小学校の教員は「よそもの」であることが少なくない。『北白川こども風土記』の成立に中心的な役割を果たした大山徳夫教諭も，出身は奄美であった。地元の協力を得なければ，成立しえなかった企画なのだ。

そのことをよく理解している『学校で地域を紡ぐ』の執筆者たちは，八方手を尽くして関係者を洗い出している。まるで探偵のごとく。あるいは足で稼ぐ刑事のごとく。京大関係者については資料も豊富にあるだろうが，それだけではなく地域の古老たちの素性まで明らかにするのは，なみたいていの苦労ではなかっただろう。教育関係，学校関係の研究は，しばしば調査対象を学校内にかぎり，上っ面だけ撫でたようなものが少なくないが，『学校で地域を紡ぐ』は，それらとは一線を画しているのである。

物足りないところ

ただ，こうした関係者の個別の役割についてはよくわかったものの，京大関係者，古老，小学校教諭，小学生それぞれの関係性が，いまひとつ明確に位置づけられていないように感じた。各論として京大関係者や古老を扱った章はあるのだが，それらが統合・昇華されていない。京大と古老の関係性はいかなるものだったのか。小学校教諭の指導はどのくらいまで行なわれたのか。小学生たちはどのように受容したのか。その綱引き，対立，協力は，結果として成立した『北白川こども風土記』にいかなる影響を与えたのか。

大学のアカデミックな知は往々にして古老の語りを否定しがちで，「正しい知識」と「誤まった知識」の峻別につながる。大学関係者と小学校教諭の関係も複雑である。上下関係になることも多いが，大山の場合は出版社の山口繁太郎との対談で，地域住民による実践を重視し，大学教員への反発をあらわにしている（一二四ページ）。

実際のところ，『北白川こども風土記』では，すべてが共存・混淆している。考古学や地理学の最新の知見が示される一方で，古塚をつぶしたことで怪異が起きた話なども収められている。桓武天皇の御陵と伝えられていたものが，政府に指定されるとめんどうなことになるからと，住民によってこっそり滅却されたという伝承まで入っているのだ（九三ページ）。もし事実だったとしたら，考古学者は頭を抱えただろう。ようするに，誰かが統一的な指針を示し，情報の選り分けを行なったようすがないのである。でどころのさまざまな情報が，そのまま使われている。

「郷土調べ」の調査の実態については，たとえば一五二ページで小学生たちが保護者や地域のひとびとに，グループ単位で聞き取り調査したことが示されている。文化人類学でいうところの，インフォーマントを使った調

査に近い。インフォーマントとは，外部の研究者が現地を訪れてフィールドワークする際に，聞き取り調査などに協力する地元の人間をさし，そこには明確な上下関係が存在する。

ところが，『北白川こども風土記』では，聞き手となるのは小学生たちであり，大学教員も古老もインフォーマントにあたる。何を選んで書くかは小学生に主導権があり，トップダウン式ないし受動的なものではなかった（三六六～三六七ページ）。とはいえ，文化人類学の場合とは異なって，小学生が相手だから，むしろインフォーマントにあたる側が指導したり教えたりといった立場になる。しかも，こどもたちが「地元」の人間であり，大学関係者がよそものだったりする。父親の藤岡謙二郎が修学院の出身で，息子の換太郎が北白川小学校に通っていたというような複雑なケースもある。

また語り手の姿勢・態度にも注目すべきだろう。古老が地域のこどもたちに「郷土」を語ることには，特別な感慨や使命感があったのではないか。小学生にしても，京大関係者から聞かされるのと，地域の古老にインタビューするのとでは，受け取り方も違ったはずである。なおかつ，こどもたちが対象ということで，フィルターがかかり，不道徳なものが隠されたり，わかりやすく単純化されたりといった可能性もある。

関係性から生まれる新しい郷土イメージとは

こうした複雑な関係性の結果として成立したはずの『北白川こども風土記』なのだが，その複層性への掘り下げがどうにも薄いように感じられた。高木史人は第5章で「評言性」としてテキスト分析の必要性を述べ，テキストが話者と聞き手の両者によって生み出されるとしている（二七二ページ）。これは第7章で池側隆之が指摘するメディア・プラクティスの問題とも関わってくる。すなわち，取材し，語り語られ，文章化するなかで，郷土たる北白川のイメージが生成したはずなのである。

ところが，それが明確な結論へつながっているかといえば，そこまでは達していない。筆者が思うに，結節点たる小学生を蚊帳の外に置いてしまったことで，関係性が見にくくなった可能性がある。もちろん，小学生のひとりひとりを追跡するのがきわめて困難なのはわかる。ただ，小学生たちの書いたテキストの分析はもっとできたのではないか。結局のところ，すべてはテキストにこそあらわれるはずなのである。今後は研究グループにテキスト分析の専門家をくわえることをオススメする。

そのようにして見てみたいのは，こうした多数の関係者が複雑にからみあった結果として描きだされた「郷土」の姿である。『学校で地域を紡ぐ』のあちこちで指摘されているように，『北白川こども風土記』が成立したのは戦後の激変期で，北白川は従来の農業・石材・製粉の村からサラリーマンの住宅地へと移行しつつあった。地域の自意識や住民の力関係も変化し，新たな北白川イメージが形成されていたはずである。

しかも，学区をあげて『北白川こども風土記』がつくられたことで，そこで生成した郷土イメージは，それこそが「本物」だとして共有・伝承されていくことになる。菊地が序章で「伝承の継承者であると同時に創造者でもある『子ども』という存在」（一〇四～一〇五ページ）と記し，村野正景が「（北白川小学校郷土室の）資料群が過去の遺産なのに対して，それはこれから新しく作り出される作品だった」（一八一ページ）と述べるとおりである。過去を調べることで未来への視点が生まれたであろうとの指摘も（三六四ページ）あり，さらにはそれが新しい伝承にすらなっていく可能性まで示唆される（二七九ページ）。ただ，こうした指摘は理念的かつ曖昧な提示に留まっており，今後への仕事が積み残されているように見える。

結局のところ，『学校で地域を紡ぐ』は，

まだまだ手を付けたばかりという印象が強い。『北白川こども風土記』は掘り返しがいのある金脈であり，やるべきこと，分析すべきテーマは無限に残っている。あまりに大変な資料に手を付けてしまったなと同情するとともに，今後を楽しみに見守っていきたい。